

リベラルとか保守とかについて

2020年12月6日@ゴー宣道場
弁護士法人Next代表弁護士
倉持 麟太郎

自己紹介



- 1983年東京生まれ
- 慶應義塾大学法学部卒業、中央大学法科大学院修了
- 2012年弁護士登録(第二東京弁護士会)
- 日本弁護士連合会憲法問題対策本部幹事
- 弁護士法人Next代表弁護士

- ベンチャー支援、一般企業法務、「働き方」などについて専門的に取り扱う一方で、TOKYO MXテレビ「モーニングCROSS」レギュラーコメンテーター、衆議院平和安全法制特別委員会公聴会で参考人として意見陳述、World Forum for Democracyにスピーカー参加、米 국무省International Visitor Leadership Programに招聘、朝日新聞『論座』レギュラー執筆者、慶應義塾大学法科大学院非常勤講師(～2017年:憲法)など多方面で活動。
- 共著に『2015年安保 国会の内と外で』(岩波書店)、『時代の正体 Vol.2』(現代思潮新社)、『ゴー宣〈憲法〉道場』(毎日新聞出版)、
- 著書に『リベラルの敵はリベラルにあり』(ちくま新書)がある。

No brain No life

「20歳のときにリベラルでないなら、情熱が足りない。40歳のときに保守主義者でないなら、思慮が足りない」



If you are not a liberal at
twenty, you have no heart.
If you are not a
conservative at forty, you
have no brain.

By ウィンストン・チャーチル

エドモンド・バーク(1729~97): 保守の起源となった自由の闘士

- 自由を重んじたバークがフランス革命を批判したわけ
- 人間の理性ですべてが設計でき、変えられる？
- 抽象的な政治理念に基づく急進的・進歩的改革を批判



人間の理性だけでなく感情に注目 → 認識能力の無限の進歩ではなく限界を認識★人間の合理性の限界を直視！

- 政治がすべきは民衆を抑え込むことではなく、「性情を理解すること」
- 「彼らとその支配者との間のどのような抗争でも、少なくとも半分は民衆の側の言い分にも理がある」(『現代の不満の原因』)

政党や政治家とは

「政党とは、その連帯した努力により彼ら全員の間で一致しているある特定の原理にもとづいて、国家利益の促進のために統合する人間集団のことである。」(『現代の不満の原因』)

➡原理なき野合は政党ではない

「諸君は確かに代表を選出するが、一旦諸君が彼を選出した瞬間からは、彼らはブリストルの成員ではなく英国議会の成員となるのである」(『ブリストル到着ならびに投票終了に際しての演説』)

何を保守するのか

★守るために変える

「何らかの変更の手段を持たない国家には、自らを保守する手段がありません。そうした手段を欠いては、その国家が最も大切に維持したいと欲している憲法上の部分を喪失する危険すら冒すことになり兼ねません」(『フランス革命の省察』)

➡漸進的に微修正しながら、過去からの連続性を具体的に保守する

「人間性は込み入っており、社会の目的は可能な限り最大級に複雑多岐です。(中略)単純な政府とは、精一杯悪くは言わないとしても根本的に欠陥があるものです。」(『省察』)

➡人間の縦軸(過去・未来)&横軸(社会とのつながり)の関係性や感情・偏見を重視
=1人の人間の理性によって把握する範囲には限界がある。ゼロから合理的に理性で世界を設計できるなんて幻想)

保守の始祖であり、リベラリズムの理論的支柱？

バーク: イギリス名誉革命は評価

→むしろ王政と対立する議会を中心とした個人と経済(商業)の自由に重心を置くリベラリズムと親和的(ホイッグ史観)

※実際に、ホイッグ党は自由党(⇔保守党)へと発展し、バークも自由党から出馬している。

ハイエク(1899~1992)は保守？リベラル？

「保守主義がまさにその本質から、われわれの向かっている方向に代わる別の道を与えることができないことである。保守主義は時代の傾向に対する抵抗により、望ましからざる発展を減速させることには成功するであろうが、別の方向を指し示さないために、その傾向の持続を妨害することはできない」

(『なぜわたくしは保守主義者ではないのか』)



変化を嫌い、階層秩序に固執＝保守
進化による変化を歓迎＝自由主義

→人間の理性には限界＝世界を把握すること不可能＝政府も社会を見通せない
＝各個人がそれぞれ幸福を追求すべき＝個人の自由とそこから生まれる自生的秩序が大事

※ハイエクにとってバークは自由主義者(笑)

ハイエクは新自由主義の権化??

ハイエクが批判したのは「集産主義 (collectivism)」

一つの主体が社会全体を統制する＝単一の(理想的な)価値体系の存在を前提
(社会主義それ自体を批判してるんじゃないくてその方法論を批判)

⇔「自生的秩序」=理念から導かれた秩序(意図の結果)よりも、人々の行動の所産としての複雑な秩序

※「小さな政府」か「大きな政府か」という対立軸で論じていない！

「自生的秩序」と「法の支配」

★自生的秩序

人は関係性から自由ではない＝歴史的に形成されたルールや慣習(先人の知恵)を知らず知らずのうちに拝借している。

「進化」＝制度や慣習という「ルールの進化」

★自生的秩序にとって各人の自由の行使(行動)が要

➡これを保障するためには「一般性」を有する「法」が不可欠

(一般的なだと強制を最小にする & 一般的な明確なルールを指針に自らの自由な生を構想する)

→ 個別的な立法、恣意的ルール変更は個人の自由への制約

👉 民主政では恣意の危険性増大＝上位概念としての「法の支配」が極めて重要
 (『自由の条件』)

保守orリベラル？ = not 社会主義

- 人間の知性の合理性への懐疑と部分性と向き合う
- 個々人の選択の自由や多様性を重視
- それにより生まれる自生的秩序を重んじる
- そのためには「法」による「一般的」で明確なルールが不可欠

☞ 憲法による「立憲主義」、「法の支配」の尊重

当然、貧困者の救済や政府の社会保障機能は全く否定していない

(※ハイエクは「小さな政府」か「大きな政府か」という対立軸で論じていない！)

共生の作法としての「会話」ーオークショット(1901~90)

「自己のめぐりあわせに対して淡々としていること、自己の身に相応しく生きていくこと、自分自身にも自分の環境にも存在しない一層高度な完璧さを、追求しようとはしないこと」

(『保守的であること』)

例) 友情:

友を自分の思い通りに変えることを求めるか？ 友情で大切なのは、「あるがままの相手を受け容れること」。友情の根源にあるのは自他の違いをそのまま認める姿勢。

(人間関係には変化を求めない領域があるはずだ。)

☞ 「統治」= より良い社会を設計することではなく、多様な価値や信念や生き方をする個々人の衝突を回避すること。

そのために「法」や「制度」を提供することが役割

※統治の仕事は「人々の情念に火をつけることではなく、むしろ、情熱的になっている人々に、この世界には異なる他者が暮らしていることを想起させること。

「会話」=保守?リベラル?

➤「会話」=人間のかかわりあいのイメージ

会話の目的は何らかの結論を出すことではなく、複数の話し言葉が行き交うこと。
多くの異なる言葉が出会い、互いを認め合い、そして同化することを求めないこと。

➡「会話」では一つの「声」が他を圧倒し、会話の参加者を「変えさせ」たり、「同化」させたりしないこと。

✓ 井上達夫 ➡ 多様な生が共生するための作法

✓ 西部邁 ➡ 会話の作法を重視し生の葛藤を平衡させることの楽しみ

抽象的命題より実践

★「合理主義者」批判

➡ 理性を強調し伝統や慣習からの精神の独立。

物事には完全かつ画一的な答えがあり、実現の場として政治をとらえる。

⇔「実践知」

慣習や伝統から蓄積された実践を重視

➡ 「自由」「民主主義」は歴史的経験を抽象化して得られたもの。このようなルールや制度は、具体的努力、自由の帰結。

…帰結だけ取り入れてもうまくいかないのでは？

中間論点整理

- 人間の合理性や認識の限界を前提(感情や偏見も軽視しない)
- 人間は関係性(自分のめぐりあわせ、歴史、)から自由にはなれないことを前提
- 理念から演繹するのではなく、人間の実践や個々人の行動の結果として醸成される
自生的秩序を重視
- そのためには何より個々人の「自由」を担保することが大切
- 「自由」の担保のため進化・改革したり保守したりするのは、慣習や実践から得られた
「制度」
- 「制度」とは具体的には「憲法」であり「立憲主義」であり「法の支配」

リベラルとは何か

(ヘレナ・ローゼンブラット『リベラリズム～失われた歴史と現在～』)

キケロ(BC106～BC43) @ローマの政治家 & 文筆家

「自由な」「寛大な」= "liber" (形容詞)

+

「自由人の地位にある者にふさわしい」"liberalis" (形容詞)

この二つの名詞形 = "liberalitas" 「リベラルたること」

☛ 市民としての徳を発揮し、共通善への献身を示し、お互い様の精神 (mutual connectedness) の重要性をわかまえている

※対義語は「利己主義」「下衆(ゲス!) slavishness」

仏独リベラリズム→ニュー・リベラリズム→リベラリズム

★フランス革命 (18C): ⇔ エドモンド・バーク

↓

★ドイツの影響 (19C): 反革命 & 政府介入主義的なリベラリズム

↓

(革命ではなく、平穏かつ慎重な改革と漸進的な進歩)

★イギリスではニュー・リベラリズムへ

↓

: (1910年までに、広く普及したことから「ニュー」が落ちた)

★アメリカに輸入

: (1914～1917年頃に共和党革新主義者 & 民主党ウィルソン主義者たち)

※ウィルソン: 1916年まで「革新主義者」1917「リベラル」

⇒ **第一次世界大戦 & 第二次世界大戦 (& 冷戦) で、アメリカ的リベラリズム = 「リベラル」であることの完成**

(※ナチスによって「ドイツのリベラリズムの失敗」というレッテル)

アメリカとリベラリズム

【ジョン・デューイの二つのリベラリズム】

- ①より人道的で政府介入や社会的な立法にも開かれている
- ②巨大産業、銀行、商業から恩恵＝自由放任

⇒ アメリカのリベラリズムは自由放任とはいかなる意味でも関係ない・・・アメリカのリベラリズム＝

①政府介入的

【フランクリン・ルーズヴェルトがこの文脈を援用】

⇒ さらに「リベラル」＝政府介入＝民主党 へ

VS

【ハイエクによる批判】

ルーズヴェルト流リベラリズムとニューディールの批判

「リベラル・ソシアリズム」の語義矛盾

⇒ 政府介入はファシズム・全体主義への入り口だ

「親切であったり、寛大であったりすることは政府の役割ではない。政府の役割は、個人の自由を守ることである。」

リベラルの変遷

【ヨーロッパのリベラル】

⇒ リベラルは共同体や共通善、道徳のために“も”戦ってきた

【アメリカのリベラル】

⇒ リベラルの「個人主義」化と「政府介入」容認

個人の権利利益に関わる個人主義的哲学

+

政府介入に親和的
(※リバタリアニズム)

このセットがまず矛盾

【日本のリベラル】

⇒ アメリカの構図をそのまま輸入(無意識的?なのが怖い)

『アフター・リベラル』との対話

1. リベラリズム＝経済リベラリズム(資本主義)

⇒ ファシズム、ナチズムによって退場宣告

2. 「政治的リベラリズムによる経済的リベラリズムの補完＝均衡

⇒ 中間層の創出によるリベラル・デモクラシーの維持

3. 「1968年:新しい社会運動」⇒ 国家、中間団体、共同体への攻撃

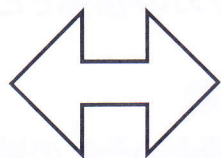
「リベラル・コンセンサス」⇒ 経済リベラリズムの再興と政府介入の共謀

||

個人化と中間層の没落によって、リベラル・デモクラシーは瓦解し、権威主義やポピュリズムに吸い込まれた

リベラルの対義語は何か

リベラル



・利己主義

(個人化)

・パターナル

(国親主義: 政府介入主義:
集産主義、全体主義)

・権威主義

リベラルのグラデーションと“保守”


【内容】

- ① 自由の価値を基底に
- ② 寛容や共同体への道徳的配慮も必要
- ③ 公德心(市民として政治参加や善き政治のために自分のことだけでなく社会全体のことを考える心)も必要

【手段Ⅰ】

- ① 放任(市民社会のみで自給自足)
- ② 国家が介入(消極～積極まで)
- ③ 全体主義

【手段Ⅱ】+

- A. 一気に変える  C. 法や制度による明示的システムで
B. 徐々に変える D. 不文律や慣習で

日本の保守やリベラル？

・前の政治体制との政治的断絶によって近代化してきた歴史

★丸山眞男：日本に保守主義が根付かなかったことが「進歩『イズム』の風靡に比して進歩勢力の弱さ、他方保守主義なく『保守』勢力の根強さという逆説を生む一因をなしている」(『反動の概念』)

＝漠然と進歩を信じるか、漫然と現状維持を望む

➡真の改革勢力は育たず、あるのは現状維持という名の強固な思想なき保守勢力

★福田恒存：リベラルの自己欺瞞＝「戦前から戦後への転換には連続はない。連続がない以上、それは進歩ではない。」進歩主義者はそれを革命と呼ぶがかったのは征服である。進歩主義の役割は、征服に向き合い、「征服による切断を乗り越えて、なんとか連続を見出し懸け橋を造ること」だったはず(『進歩主義の自己欺瞞』)

戦後政治において忘れられたもの

- ・日本の自由というものは「コンスティテューションナリズムというものに媒介されない。(中略)だから機構というものの対決がない。(中略)フレームがないことが、自由であるという捉え方」(丸山)

➡自由への主張が制度や機構と結び付けて考えられなかったがゆえに、立憲主義とも接合してこなかった。

・戦後日本政治

保守すべき共通の価値を模索することなく、「反共」と「経済成長」のみを一致点とした曖昧な政治勢力としての保守一強が続いた。

日本のリベラルと日本的保守

【リベラル】

→日本のリベラルの「自由」は「左派エリートのための自由」

全体主義的、集産主義、権威主義的な政治を平気で受け容れる・・・「リベラル」ではない
(※リベラルとデモクラシーのそれぞれの負の側面を直視、克服の過程がなかった)。

個人主義化(「政治的引きこもり」)≡ニヒリズムへの道

【保守】

→価値へのコミットなしに現状を“保守”＝状況主義的保守

「押しつけ憲法」として現行秩序を否定＝保守ならざる保守

「反共」と「経済成長」という結束を失った今、いったい何を保守するのか

保守vsリベラルや憲法を論じる前に

ジョナサン・ハイトの道徳基盤の分類

①ケア②公正③自由④忠誠⑤権威⑥神聖

戦後日本が進歩・改革として目指したものは何だったのか？

戦後日本が守ってきたものは何なのか？

リベラルとデモクラシーの緊張関係を再度認識すべし

2020年 ↓

克服し、さらに改革？するものは何なのか？

戦後日本社会が培ってきたもので保守すべきものは何か？

このあたりの最低限のコンセンサスを持ちながら議論すべし！